

福祉教育への挑戦(5)

伝わらない…日々勉強

高井裕二

「テストに出るか出ないか」という関心から

高等専修学校での授業、自分自身の福祉施設での経験などを織り交ぜて授業を展開している際に支援経過、エコマップやジェノグラムなどを板書して伝えることがあります。そんな時、決まって飛んでくる質問が、

「先生、それ(板書)ってノートに書いたほうがいい？テスト出すの？」

というテンプレートです。もちろん、先行して「書かなくてもいい」と伝えてはいますし、個人的な経験を平常試験で出しません。ただ、生徒にとっては「先生が話していることはテストに出るか、出ないか。出るとしたら、どんな出題をするのか」ということに集中していると感じる時があります。問題(評価)については、穴埋め問題中心の学校の定期試験問題とマークシートで解答する介護福祉士国家試験問題とのギャップをどのように考えるかという話もいずれ取り扱いたいと思います。

今回は、生徒に自分の意図することが伝わらないという自分の失敗談を言語化してみたいと思います。

演習として「点つなぎ」を取り入れたが・・・

レクリエーションに関する単元の時です。高齢者施設でも取り入れられている「点つなぎ」を体験してもらいながら、コロナ禍での工夫点、高齢者の身体状況を見ながら多くの高齢者が参加できるように配慮すべき点(利き手を十分に動かせない、文字が見えにくい場合高齢者に対してどのようなサポートがあると良いか等)について考えてもらうように計画を立てました。「今日はこれをやってもらいます」と点つなぎのプリントを見せると反応は上々。小学校時代にやったことがあると話す生徒もいて、気持ちが高まっている様子。私から次のように投げかけます。

「ただ『やるだけ』だと、ただの遊びです。みなさんが介護施設でレクリエーションを担当すると考えて、高齢者が実施するにはどのような工夫が必要か考えてみましょう」

そう伝えて、プリントを配りました。結果的にどうなったかということ、ただ「点つなぎ」をしただけのような時間になってしまいました。生徒同士でどちらが先にできたか競

い合う、熱中するあまり次の番号が見つけれず教員の指示が聞こえないといった状態になりました。演習の時間が終わり、ふりかえりをする時間になっても点つなぎを続ける生徒もいたり、プリントをノートに貼るかどうかということに関心が移っている生徒もいたりして、全体での振り返りの時間も十分に行えたかという、疑問が残ります。

ただ単に生徒にとって楽しい時間を提供してしまったようで、翌週になっても

「先生、今日は点つなぎしないの？」

と純粹に尋ねられた時に、自分の未熟さを改めて痛感しました。

教員としてのふりかえり

ここからは反省点について考えてみたいと思います。色々あると思いますが、①生徒、クラスへのアセスメントが不十分であったこと、②指示の仕方が漠然とし過ぎていること、の2点について考えてみます。

まず①ですが、常勤で関わっている大学生と同レベルでこちらの意図を感じ取ることができると考えていたと思います。以前、書いたように中学校から明確に福祉を学びたいと考えて高等専修学校をせんとくした生徒ばかりではありません。中には福祉への関心が薄い生徒もいます。加えて、勤務校では夏休みを使って介護職員初任者研修の資格を取ることができますが、「取らない」という選択肢もあります。そのため、「介護施設でレクリエーション」ということが他人事になってしまう生徒がいても不思議ではなかったと思います(もちろん教科「福祉」の授業ですから、それを徹底することも可能です)。

そして②も指示を口頭だけでなく、視覚的にも伝える工夫があっても良いと感じています。例えば、板書で問いをかき、後で書き込みにきってもらうこともできるし、ワークシートを準備して、気づいたことを記入させ提出させることもできました。介護職員としてのイメージがつかない生徒に対しては、友達や身近な高齢者と一緒にするなど、お題を個別に設定できるように対応できれば、よりイメージがついたかもしれません。新型コロナウイルスの感染防止の観点からグループでの作業ができていませんが、気づいたことを全体で共有する前に2、3名でもグループ分かれてふりかえりを行うといった過程を踏むなど言語化のステップもあっても良かったと感じています。

ちなみに同じお題と方法で大学生に実施してみたら、想定していたような展開になりました。私に授業の腕があるのではなく、教科「福祉」を教えるピントがズレていて、大学生の学ぶ態度に助けられているだけだと思い知らされる出来事になりました。週に1回という生徒との限られた時間ではあることを言い訳にせず、限られた時間だからこそ、準備を丁寧に行っていきます。